

病棟での全職種によるカンファレンス

MS W: でも今は無料低額診療だけと医大病院は認定施設ではありません

MS W: そんな簡単なものじゃないですよ

MS W: 住所を旭川に持ってこなければなりません。お母さんのところはリバースモーグで同居できないんです

MS W: アパートを借りて一人で生活するしかないのかな

MS W: 一日だけでもお姉さんについてもらって実績を作るのはどうでしょう!!!

Nre: それは危険すぎます! (nurse)

MS W: とにかく市役所に行って相談してきます

Dr: とういわで旭川医大に紹介しようと思います

Dr: それじゃあ生活保護とって

Dr: なんじゃい、まだ難しいことをいいおって

Dr: へっ?なにそれリバグシグシって?

Dr: で、どうするの?

Dr: そんなの無理じゃん

Dr: よし!それで行こう!

Dr: がんばれ!!

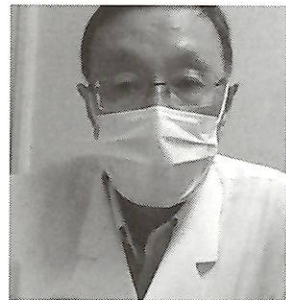
14

仲谷医師とスタッフのやりとりを分かりやすく紹介

オロロンプロジェクト開始

一条通病院の事例から学ぶ

「実習ができない」「みんなで集まる企画や学習会ができない」——。医学生たちは、コロナ禍によって集まる機会がなくなりました。道民医連の奨学生も実習や友の会と関わりながら民医連の実践を学ぶ機会が激減していました。そこで、道民医連の医学対はオンラインを活用して奨学生会議などをおこない、全国の奨学生が学び交流する機会を設けています。



講演する仲谷医師

道民医連医学生委員会では、奨学生の成長の場を確保することを目的に、2ヶ月に1度、全道の各法人持ち回りで奨学生向けの学習会を開催することになりました。

奨学生が考えた名称は

オンラインを活用 奨学生学習会開催

集まれないならZOOMで交流

シリーズ 2021
医学対なう

「オロロンプロジェクト」石狩市稚内間の日本海に沿った道路、オロロンラインにある日本最大級の風車に例えて、北海道から民医連の風を大きく吹かせようという思いを込めました。

「医師が声あげて」

5月17日に開催した第1回目の「オロロンプロジェクト」は、道北勤医協が担当。一条通病院の糖尿病グループが経験した困難事例をもとに、「経済的に困難な患者さんを今の制度で救うことができるか」「患者さんに寄り添うとは？」について、講演会や多職種を交えてのディスカッションで学びあいました。

講師の仲谷医師は「臨床現場で患者さんたちからみえてくるものがあります。医師が声をあげることが必要です。民医連の全職員で力をあわせて、社会変革を頑張っていきたい」と呼びかけました。

参加者からは、「SOSの声をかせない人をどのように見つけたらいいのか考えさせられた」「社会にある課題について、私たちが力を合わせて行動していかねければ道は開けないと感じた」「多くの勉強会に参加してきたが、スタッフの方がこんなに想いを伝えてくれる会は初めて」などの感想が寄せられました。

今後もオロロンプロジェクトのとりくみを随時紹介していきます。(山田桃子・県連事務局)